平時経とその子保遠

――「平中物語」の成立と作者に関する一試案――

妹尾好信

一　はじめに

周知のごとく、『平中物語』は平貞文をモデルにした男を主人公とする、長短三十八の章段から成っている。[注1] 実在人物の行状を描いていることや、すべての章段が和歌を含んでいることなどから、『伊勢物語』や『大和物語』と同様、歌物語のジャンルに入れられるのが普通である。とりわけ、一人の男を主人公とし、多くその色好みぶりを描いている点など『伊勢物語』により近い。そして、その『伊勢物語』を始めとする同時代の他の歌物語と同じく、作者および成立の事情やその年代等、明確なことは一切知られていない。

そのうち成立年代については、目加田さくを、萩谷朴両氏の御研究[注2]によって相当限定されてきた。しかしながら、作者に関しては、いまだ積極的な作者論はほとんど成されていないと言ってよい。わずかに萩谷朴氏は、平中自身が書き残した貞文集を母胎として主人公の心情を如実に再現することの出来る、平中自身と時間的にも空間的にも近い環境にあった何びとかを想定された。[注3] これに対して、三保（小沢）サト子氏は、『平中物語』を「延喜二〇年頃、宇多法皇に文芸作品を提出するよう求められた平貞文が、青年時代のみずからの経験を歌物語風にまとめたものである」とされ、貞文自作説を唱えられた。[注4] 他に目加田さくを氏も最近自作説に傾いておられるようである。[注5] 自作説は面白い

仮説ではあるが、私には、物語中での主人公の描かれ方を当時の自作の日記や物語的家集における描写術の限界に照らし合わせてみたとき、主人公の不在場面の精密描写など、貞文の自作とするにはあまりにも主人公の客観化がなされすぎているように思われ、もうひとつ納得しかねる。むしろ萩谷氏の御説の方に聴くべきものが多いように思われる。

そこで私は、萩谷氏の御説を踏まえて、以下、他作説の立場から『平中物語』の作者および成立事情に関してかなり大胆な仮説を提出してみたい。

二

前述のように、『平中物語』は形態的には『伊勢物語』に極めて近い。さらに、すでに諸家によって指摘されている(注6)ように、単に形態上だけではなく、内容的にも意識して『伊勢物語』中の有名な章段と似た場面を設定したり、あるいは『伊勢物語』中の歌を踏まえた歌を折り込んだりしている。明らかに『平中物語』の主人公の行動は『伊勢物語』の主人公の行動を念頭において描かれている。

ところが両者のイメージは大きく異なる。これもすでに様々に論じられているが、『伊勢物語』の主人公が美しく燃え上がるような恋愛を謳歌するごとく描かれているのに対し、『平中物語』の主人公はままならぬ恋愛に苦心惨澹してはいつも失望している。『伊勢物語』では一首の和歌、一組の贈答がそれぞれの章段のクライマックスを彩り、作中人物にも読者にも大きな感動を呼び起こしているのに対し、『平中物語』では力作の和歌もほとんど主人公に利益をもたらさない。当代の有名歌人としてそれなりの自負をもっていたであろう貞文自身を作者と考えるにはこの点でも問題があろう。この両者の主人公の描かれ方の相違は単に時代の変遷とか文学の享受層の変化とかだけで説明できるものではないであろう。これは両者の創作意図の違いに基づくものと考えられる。

思うに、『平中物語』は、『伊勢物語』に描かれた理想的・夢幻的で美化された恋愛の様相を意識して退け、逆に現実的・散文的で不如意な恋愛をありのままに描くという意図のもとで創作されたのではないか。現代と同様、当時の貴族社会においても現実の恋愛はそうそううまく行くものではなかったであろう。よほどの権門に生まれた美男子でもない限り、多くの場合恋愛には『平中物語』に描かれているごとく種々の障碍や幻滅がつきまとっていたはずで

ある。とりわけ受領など中流以下の階層には。

このように考えると、『平中物語』は『伊勢物語』に描かれたロマンチックな恋愛世界にむやみに憧れる青年貴族に警告を発する意図で書かれているように思えてくる。作者は、『伊勢物語』の換骨奪胎とも言える手法を用いて『伊勢物語』の恋愛世界の現実化を試みているわけであるが、その例は『平中物語』三十八章段のうち十章段にわたって指摘することができる。詳細な検討は今、紙数の都合上省略するが、章段番号だけ示すと具体的には次の諸段である。

『平中物語』		『伊勢物語』
第一段	―	東下りの諸段
第四段	―	第一〇五段
第九段	―	第四七段・三段・一二三段
第一一段	―	第六三段
第一二段	―	第四三段
第一七段	―	第二三段
第一八段	―	第一〇七段
第二四段	―	第五段
第三二段	―	第二四段
第三七段	―	第四九段

十章段はあるいは少ないと思われるかも知れないが、『平中物語』が貞文家集に基づき、集中の歌を利用して創作されたという制約を考えれば決して少ない章段数ではないであろう。

『伊勢物語』に恋愛以外の要素、すなわち友人や権門、肉親などとの交際を描いた章段が相当数あるように、『平中物語』にも同様な章段があり、恋愛譚とからめながら語られるものを含めると十章段ほど数えられる。これらの章段の存在も『伊勢物語』の体裁にならったものと考えられるが、そこに描かれている平中の姿は、恋愛を二の次にしても肉親や上司、あるいは友人たちとの交際を優先する姿である。たとえば、第一段・第三六段では親に対して自分の恋愛行動を抑え、第二五段・第三八段では知人や上司とのつき合いのため恋愛を中断しているといった具合である。これらは各例を具体的に指摘し、詳細に論じなければならないが、紙面の都合上ここでは省略し、恋愛譚の例を含めて別稿を用意するつもりなので、そちらに譲りたい。

さて、このように考えると、『平中物語』には、青年貴

族に対して好色生活を否定し、天皇や権門、上司、さらに肉親（特に父親）や友人たちとの交際、すなわち官僚や文化人としての男性社会における社交を重要視する性格があるということになる。すると、ごく自然に、『平中物語』は非権勢貴族の青年に実社会での保身術を教えるための、一種の処世教科書として書かれたものではないかという想像を導く。となると、それはまさに王家裔という血統は高貴でもすでに権勢からは遠ざかり、もっぱら文化人としてのみ身を立てていた平貞文家の子弟などにこそ有益な教訓書となりうるのである。

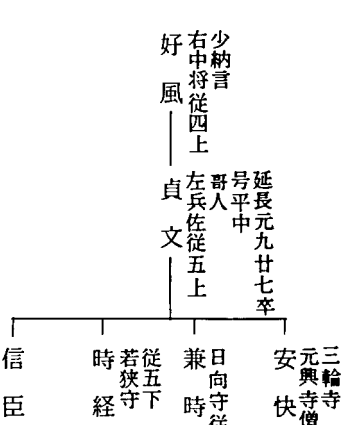
当時の文学作品が同時に実用書としての性格を併せ持つことは珍しいことではない。すこし下った円融朝には、出家した尊子内親王に仏教を教えるために書かれた源為憲の『三宝絵詞』や、選子内親王に実社会の厳しさを教え、斎院退下を思いとどまらせるために書かれたとも考えられている『住吉物語』[注7]などの例のごとく、権門や皇族の依頼に応じて教科書あるいは教訓書的文学作品が作られることが盛んになる。それ以前に権門以外の間にも似た形での教訓書的作品が作られたとしても不思議はない。ちなみに、早く『土佐日記』にも権門の子息に対する和歌作法書といった性格を認める萩谷朴氏のような立場もある。[注8]『平中物語』は権門ではない貴族の子弟を対象にしているところに特異性があることになる。

さて、『平中物語』に貞文家の子弟教育にふさわしい処世教科書的性格があるとなると、貞文の近親者に作者を求める立場はますます有力になってくる。その際、貞文自身を作者と考えることには前述のごとく無理があるので、当然、貞文の子弟あたりが候補にあがるであろう。それも子供の教育に熱心で文才もあり、しかも処世術にたけた勤勉実直な人物でなければならない。貞文の子弟の中に、はたしてそういう人物が見出せるであろうか。

三

まず、『尊卑分脈』によると、平貞文には兄弟の記載はなく、四人の男子が記載されている。（桓武平氏仲野親王流）

他に藤原藤成流系図により藤原文行の妻となった女子が知られるが、男子は安快・兼時・時経・信臣の四名である。そのうち、信臣は萩谷朴氏の説かれるように[注9]藤原定文の男信臣が混入した疑いがある。信臣にだけ官位の記載がないのも疑いを強くさせる。



長男と思われる安快は出家して僧となっており、『僧綱補任』によると、天延二年（九七四）五月十一日に権律師となり、この時三論宗元興寺の僧。天元二年（九七九）十二月二十一日に律師に転じ、同四年（九八一）十月二十二日に権少僧都に昇り、永観元年（九八三）に没している。『僧綱補任抄出』によると、入滅時広隆寺別当であったという。父貞文の没年が延長元年（九二三）であるから、安快の享年は少なくとも七十歳は越えていたであろう。したがって彼は六十歳を越えて僧綱に列し、以後は比較的順調に昇進しているが、早い出世ではない。出家した年齢はわからないが、没落貴族の長男に生まれたことで、俗世での栄達をあきらめ、出家はしたものの僧籍での出世も思うにまかせなかったといったところであろうか。在俗中に子供がいたかどうかはわからず、文学との関わりも全く不明であり、俗世での保身など考えていそうにないから、彼を『平中物語』の作者と考えることは不可能に近い。二番目に記載されている兼時については、『尊卑分脈』の注記以外の記録はいまのところ全く見出されない。

ところが、三番目に記載の時経については、いくつかの文献にその名が見える。萩谷朴氏は『平中全講』に、時経が天慶五年（九五一）六月三十日、勅使となって藤原扶幹家へ橘近保の捜索に出向いたことを示す『本朝世紀』の記事と、天徳四年（九六〇）三月三十日の内裏歌合に左方方人として、『尊卑分脈』の記す一子である童保遠を連れて参加している主殿頭平時経（これつね）の名前が見えることをあげられた。後者は時経が貞文の文化人的素養を受け継いでいることを示すものであり、彼が貞文家の和歌的正統を継承したことを想像させる。そうすると貞文の家集は当然時経に伝えられたであろうし、それをもとにして歌物語を創作する可能性は貞文の子息の中では彼が最も大きい。実は、早く

萩谷氏も、臆測とは断わりながらも、『平中物語』の作者として「時経その人を考えるのが最も相応わしいと考える」と述べておられるのである。(注10)

私はこの萩谷氏の臆測はおそらく当を得ていると思う。先に述べたような『平中物語』の創作意図を考えるとき、その作者として時経はまさしくぴったりな人物なのである。

四

まず、子供の教育に対する熱意という点では、時経があの天徳の内裏歌合という晴れの場に一子保遠を同席させることを許されていることに注目したい。これは、日ごろから息子の教育に熱心な時経に目をかけていた天皇の計らいではなかろうか。貞文家の正統を継ぐ者としての高度な文化人教育の一環として時経は保遠に晴れの場を体験させたかったであろう。この歌合には、順・元真・能宣・忠見・兼盛といった当代一流の歌人たちが参加して歌を詠進しており、彼らとの接触によって保遠に文化的な刺激を与えたかったであろうし、何より、村上天皇をはじめ、実頼を筆頭に師尹・伊尹・兼家・朝忠といった権門貴族が方人として名を連ね、また同じ殿上童として少年時代の道隆や朝光も参加しているという、最高レベルの官僚とその子息たちとの接触が保遠の将来に大きなプラスになると考えたであろう。

次に時経自身の人となりであるが、これは記録に残された彼の経歴や行動から大方の推測が可能である。

萩谷氏があげられた以外にも時経の名は記録に現れる。うち最も早いものは、前田家本『西宮記』巻三裏書が引用する『九暦』の逸文である。これによると、天慶元年（九三八）四月二十一日、蔵人であった時経が賀茂祭の解陣を時の朱雀天皇に奏している。

廿一日、大納言(藤原扶幹)以蔵人時経、令奏可解陣之由、依内侍不候也、云々（『大日本古記録』による）

そして、時経はその四年後に蔵人兵部大丞として藤原扶幹家捜索の勅使となっているのである。『本朝世紀』天慶五年（九四二）六月三十日の記事である。

今日。左右検非違使自レ暁囲二守故致仕大納言藤原扶幹卿家一。是為レ捜二求駿河掾橘近保一也。但季子内親王買二領件家一。(中略)被レ下二宣旨一。将二以捜求一云々。**爰遣**二勅使蔵人兵部大丞平時経一。共令レ捜二求彼内親王并故大納言室家之居処一。而遂不レ得二其実一。日晩

解ゝ囲散去、云々（『新増補国史大系』による）

兵部大丞は正六位下相当官であるから、この時時経は六位蔵人であったわけである。清少納言が『枕草子』の「めでたきもの」の段で六位の蔵人を言葉をつくして称えているように、六位蔵人に任ぜられるということは、彼ら中流貴族層にとってはとりわけ大きな喜びであった。位階低くして天皇に近侍することができ、さまざまな特別待遇を受け、叙爵すれば受領としての将来は保証されたも同然だったからである。時経が若くして六位蔵人に任官していること自体、彼の官人としての有能な素質を物語っている。しかも五位を含めて七人ばかりもいる蔵人の中で特に天皇への奏上役を仰せつかったり、勅使として派遣されたりしているのは、時経の実務家としての手腕や勤勉さが認められての抜擢であろうと考えられる。

そして、勅使となって十四年後、時経は主殿頭として天徳内裏歌合に参加しているのである。この間に従五位下に叙せられている筈である。仮にこの天徳四年（九六〇）を四十五歳、童保遠を十五歳と推定すると、保遠の誕生は時経三十一歳の天慶九年（九四六）、時経が六位蔵人として活躍したのは二十三歳から二十七歳の頃のこととなる。父貞文が二十代半ばにして勤務怠慢のかどで免官処分を受けていることなどを教訓として、時経はひたすら勤勉に努めていたのであろう。貞文は時経が八歳の頃にすでに亡くなっている。

さて、天徳内裏歌合にも、時経の勤勉な性格の窺われる記録が残されている。仮名日記に次のような記載がある。

日のうち傾きて、ものの色見ゆるほどにていとめでたし。かかるほどに、左いと遅く参るとて、主殿頭平の時経を召して、遅しとめさせ給ふ。なほ遅ければ、六位蔵人平の珍材を召して責めさせ給ふ。ただいま参らすと申す。かかるほどに、日いといたく暮れぬ。又蔵人藤原の重輔を召して、遅きよし仰せ給ふ。（本文は二十巻本、異文は十巻本、いずれも萩谷朴氏著『平安朝歌合大成㈡』による）

歌合の準備万端整ったのに左方の方人がなかなか参上しないので、村上天皇はまず時経を召して催促しているのである。それでもまだ参上しないので次に蔵人平珍材と藤原重輔を召しているが、まず最初に時経を召したのは、彼が単に蔵人経験者として珍材や重輔より先輩格であったためだけではあるまい。時経はその事務的手腕を買われて左方

方人の取りまとめ役のような役目を仰せつかっていたのではなかろうか。彼の身分や年齢もそれにふさわしいように思われる。この時四十五歳とすれば、左方方人の中では別格の御大実頼を除いて最年長である。たとえ公的にそういう役目を担っていたわけではないにしても、天皇の眼がまず時経に止まったのは彼なら方人仲間の事情に通じていると思ったからであろう。よしんばそうでなくとも、時経が左方方人の中では最も早く参上していたことは間違いない。これも時経の勤勉な性格ゆえである。豪華にしつらえられた方人の席にいちはやく参上し、息子と並んで坐っている時経の真面目そうな顔が目に浮かぶようである。

そしてその翌年、時経は宇佐使となって九州に下っている。『西宮記』巻二十四裏書が引く『天暦御記』の逸文に次のような記事が見える。応和元年（九六一）閏三月のことである。

廿一日。奉宇佐使伊陟本心相違帰京云々。廿二日。令神祇陰陽等卜伊陟帰京云々。又仰令卜可遣使五位三人。時経、清遠、懐忠時経合卜。（『史料大成』による）

これと『日本紀略』同二十二日の記事とを合わせると、七日に出発した宇佐使左少将藤原伊陟が備後国で発病し前途不能になったとの知らせがはいったので、五位三人を代理候補にたてて占わせたところ時経に決定したというのである。これも、ピンチヒッターとは言え、宇佐使に抜擢されたことは時経の事務的手腕とヴァイタリティーを買われてのことに相違ない。『日本紀略』の次の記事により、時経は同年五月二十日に宇佐に向けて出発していることがわかる。

廿日壬午。差遣主殿頭平朝臣時経於宇佐宮。伊陟不参之故也。（『新訂増補国史大系』による）

時経の名が記録に現れるのは以上であるが、ひとつ注目すべきは、『岷江入楚』巻第二十三「初音巻」に引用された『李部王記』逸文の記事である。延長七年（九二九）正月十四日の男踏歌の模様を伝えた記事であるが、うやうやしく並んだ舞人たちの服装を詳細に描写したなかに、

童子二人在舞人列右衛門督児令阿子故貞文子菖蒲町其装束如舞人着花加多鬘房及着練鞋、云々（『国文注釈全書』による）

という記事がある。(注11) 延長七年といえば、貞文が亡くなって六年後、時経推定十四歳の年である。この「菖蒲町」とよばれた童が元服前の時経であるとすれば、彼は少年時代からすでに晴れの場に登場していたことになる。時経が貞文の

末子であるらしいことからもこれが時経である可能性は強くなる。天徳内裏歌合の後宴で時経は歌うたいをしているが、彼はもともと音楽や舞の才能があったのであろうか。芸術的な方面の素養をつけることも重要な処世術である。

宇佐下向以後の時経の行跡は記録に見出し得ないが、以上のことから、時経が父貞文とは正反対と言ってよい勤勉な実務家であったらしいことが知られる。まさに父親の失敗を教訓として自分の身分にふさわしい処世術を実行した人物であると言えよう。

五

それでは、何故、名にし負う色好み平貞文の息子である時経がかくも真面目な性格の人物に育ったのであろうか。これは、彼が幼くして父親に死別し、その後は母親のもとで育てられたためであると思われる。兄弟の中で時経が嫡子のようになっているらしいことから、時経は貞文の正妻腹であろう。貞文の正妻と言えば、『大和物語』第六四段が伝えるところの、あの平中が連れて来た若い女を追い出してしまった気丈夫な女である。『平中物語』でも第二二段などに、平中の妻が嫉妬深くて行動派として有名であったことの窺われる記述があるが、彼女にしてみれば、夫の好色癖にはさんざん手を焼いていた筈である。そういう彼女の手で育てられた時経であってみれば、平中のような好色性を否定した徹底的なまめ人教育を施されたであろう。したがって時経は、ものごころつくまでには亡父貞文の歌人としての側面には後述のようにいたく尊敬の念を抱きながらも、好色者としての側面は否定的に見る冷徹な眼がそなわってしまったのであろう。それゆえ、自分の父親の恥とも言える恋愛失敗談を書き連ねることができたのであろう。父の恥の公表を憚るよりも、実の祖父の失敗談であることによってその教訓を保遠がいっそう身につまされて受けとることの効果の方を重視したとも考えられよう。

六

さて、時経は貞文家の和歌的正統を受け継いでいるらしいと述べたが、時経は、勅撰集をはじめ他の和歌資料にも詠歌は一首も見出されない。このことは時経に和歌の才能がまるでなかったためというわけではなく、彼が公の場で歌を詠むことを極力避けたためではなかろうか。それには おそらく父貞文の歌人的名声への遠慮があったに相違ない。

父は『古今集』に九首もとられた有名歌人である。幼くして父を失った時経はものごころついてからまったく父の歌人的名声という遺産で勝負してきた。自分にはとうてい父に匹敵する歌才がないことを悟った時経は、父の名を汚さないためにも人前で和歌を詠むことを慎んだのではないか。ちょうど清少納言が元輔の子として歌作に負い目を感じていたのと同じように。ただ清女は負い目を感じながらもけっこう歌を乱発していたが、根っから真面目人間である時経の場合はもっと徹底していたのである。歌作は控えても、彼に和歌の心得があり、それを認められてもいたことは天徳内裏歌合の方人となっていることにも明らかである。

和歌では勝負できないと悟った時経が、自らの文才を散文の創作に託してみようと志したと考えるのは自然であろう。『平中物語』執筆の動機には、第一に子弟に処世術を教える教科書を作るという実用的側面があったが、別に時経のいわば文人としての面目を発揮したいという野心のようなものがあったに相違ない。

直接のきっかけはおそらく、元服を前にした息子保遠が『伊勢物語』に耽溺し、そこに描かれているような好色生活に憧れていることに危惧を感じたためであろう。何とか保遠に現実の恋愛のままならなさ、好色生活の空しさを教え、勤勉な官吏の道を志させる方法はないものかと思案した時経は、父貞文の家集（それはある程度まで歌物語化されていたかもしれない）をひもとき、そこに記されている贈答歌を利用して、『伊勢物語』のスタイルをまねた物語を創作したのである。必要に応じて新作の和歌も折り込んだであろうが、あくまで自分の散文能力を試す意図であったため、『伊勢物語』に比して遥かに和歌より散文の比重の大きい、作り物語に近いほど詳細な描写を駆使することになったのであろう。

七

それでは、『平中物語』はいったいいつ作られたのであろうか。私は、以上のような執筆意図で作られた『平中物語』は、おそらく保遠の元服に際して作り与えられたものであろうと考える。処世術の教示を目的とした書であってみれば、一種の成年戒として与えるのが適当だと思われるからである。とすると、先に述べたように保遠は天徳四年（九六〇）の時点で殿上童であるから、まだ元服前である。先のようにこの年を十五歳とすれば、保遠の元服はこれか

らそう遠くない後、遅くとも二年後の応和二年（九六二）の十七歳頃までには元服したであろう。したがって『平中物語』の成立は天徳四年から応和二年頃ということになる。ちょうど時経が宇佐の使となって九州に下向したりしていた頃、息子のためにこつこつと執筆されていたらしい。

この推定時期は、萩谷朴氏が末尾付載説話の解釈によって導かれた推定成立時期（注12）、すなわち藤原顕忠が右大臣に在任していた天徳三年（九五九）から康保二年（九六四）の間にぴったり収まるのである。

ただし、この萩谷氏の推論は末尾付載説話の成立年時の範囲を示すものであって、本文の成立はそれ以前に遡る可能性もある。しかしながら、私の説に基づくと、末尾付載説話は本文成立後まもなく書き加えられたことにならねばならなくなる。はたして末尾付載説話はいかなる事情で書かれたのであろうか。

八

末尾付載説話、すなわち富小路右大臣顕忠の母にまつわる説話を記した巻末部分の処理は、『平中物語』研究の際に避けて通れない重大問題であるが、これがなかなか厄介である。先学諸氏はさまざまに解釈を試みられたが、大きく分けると、書き出しや敬語法、実名の出し方など種々の特異性を持つこの部分を『平中物語』の本来の章段と解するか否かになる。まず、目加田さくを氏は、これを本来の独立した一章段であったとし、数次にわたる注記混入の過程を経て今日見られるような特異な形ができ上ったと解された（注13）。これに対して萩谷朴氏は、第一文を直前の第三八段末尾に直接つながるものとし、以下をその第一文の注記の形で付加されたものであるとされた（注14）。また福井貞助氏は、『平中物語』第一三段とその前後の関連章段に対する注記として書かれたものが巻尾に置かれたものだとされた（注15）。しかしながら、いずれの御説もこの説話がこの位置にこういう形で置かれたことの必然性を説明するにはもうひとつ説得力に欠けると言わざるを得ない。各説の欠点を補いつつ再検討する必要があると思われる。

まず、目加田氏のようにこれを本来の独立した一章段とするにはいささか無理があろう。これはその文章の特異性から見て明らかに本文とは区別されるべきである。萩谷氏が指摘されたように、何段階にもわたる複雑な注記混入過程を想定するのには無理がある。

ところがその萩谷氏の御説では、「まことや桧の隈川は渡るとは見し」を前段に続ける点に無理があろう。福井氏の指摘されたように「まことや」はこれから新しい話題を始める場合、何かを思いついた時に発する語である。また、上村忠昌氏の御指摘[注16]のように、「桧の隈川は渡る」は「あっけない」の意に解するよりもむしろ「つれない、そっけない」の意味にとるべきである。

福井氏の御説はやはり第一三段前後の注記が巻末にくる必然性の説明に無理があろう。

以上のことを念頭に置きつつ、この付載説話の解釈を再検討しなければならない。

その際に最も参考とすべきは、萩谷氏が、「まことや桧の隈川は渡るとは見し」を作者の評語とされ、「富の小路殿の右大臣殿の方に言ひたるぞ」はそこに引用された「桧の隈川は渡る」という歌句の出典を考証した追記者の意見であり、「同じ右大臣殿の」以下はその和歌を含む原拠説話であるとされた解釈である。冒頭の一文は確かに批評の言葉であるらしい。ただし、前述のように「桧の隈川は渡る」は「つれない、そっけない」の意ととるべきであるから、これは直前の第三八段をのみ受けるものではなく、おそらくは『平中物語』の総体を受けるものであろう。『平中物語』に描かれた恋愛相手の女性たちは、平中の力作の長歌に返事もよこさなかったり（第三段）、別の男を通わせていたり（第一七段）、変に疑い深かったり（第二二段）たいていはつれなくそっけない女性である。この一文はこういう全体の内容を受けて、「そうそう、〔桧の隈川は渡る〕の歌ではないが、恋愛なんて本当にそっけなくつれないものだなあと思いましたよ」との評語なのである。

こう考えると、これは物語の作者自身よりもむしろある読者が読後の感想を記したもののように思えてくる。この一文は『平中物語』の読後感を要約したものとしてまさに的確な評言だと言えるのである。

それではこれを書きつけた読者は誰かというと、もちろん確かなことはわからないが、どうもこの物語の第一享受者たるべき保遠ではないかと思われる。すなわち、父から与えられた物語を読んでの感想を巻末に書きつけたのではなかろうか。

保遠の抱いた感想は、何よりも現実の恋愛のままならなさを痛感したことであった。彼はこれを何とかうまい言葉で表現しようと考えた。いろいろ考えた末、ふと思い出し

たのが、物語の主人公たる祖父貞文の詠んだ一首の歌であった。「まことにや駒もとどめで笹の舟桧の隈川は渡り果てにし」。この歌の意味は、「本当ですか。あの人が馬も止めないで、そっけなくあなたの前を通り過ぎたというのは」といったところである。保遠はこの歌の下句「桧の隈川は渡る」をとって恋愛相手のつれなさ、そっけなさを表現してみたのである。「まことや」という感動詞は、いい言葉を思いついた喜びのあまり書きつけてしまったのであろうが、あるいは貞文の歌の「まことにや」をもじって「まことや」とつけたのかもしれない。

保遠がうまい言葉で感想を記すことにこれほど執心したのは、何か特別の背景があってのことではなかろうか。思うに、父時経は彼に『平中物語』を与えるに際して注文をつけたのではないか。この物語を読んでの感想を、何か気のきいた言葉で表わしてみよ、と。この時には、「お前はどうも昔物語なんぞに憧れていかん。恋愛などというものはそんなにうまくいくものではない。元服したこの機会にこの物語を読んで現実の恋愛について知り、お前が実社会でどのように生きたらよいかよく考えてみよ」というような訓示の一席も垂れたかもしれない。父に似て律気な保遠はこの父の注文に一生懸命答えようと努めたのであろう。その甲斐あってこの的確な評言を見出し得たのである。

そして、その後に保遠はこの貞文歌を知った出所を明記した。「富の小路殿の右大臣殿の方に言ひたるぞ」。保遠は顕忠邸に親しく出入りしており、何かの折に祖父と顕忠母とにまつわる歌語りを女房か誰かから聞かされたのであろう。天徳内裏歌合には顕忠の子元輔・重輔が参加しており、元輔の子為義は保遠と同じく殿上童として左方に列している。保遠と同年輩の為義との親交は容易に想像できるわけである。「富の小路殿の右大臣殿の方」などというかしこまり過ぎた表現は、いかにも若い保遠が興奮とともに書いたものらしい感がある。

以下はその具体的な歌語りの内容を書き留めたものである。これは後に別人が調査して書いたものかもしれないが、敬語の使い方から推しておそらく保遠自身が書きつけたものであろう。ただ、「同じ右大臣殿の」という改まった書き出しから考えて、これは前の二行を書いた時から時間をおいて後に書かれたものらしい。多分顕忠邸に行って歌語りの正確な内容を確認してきて書きつけたものであろうと想像する。

保遠はここまで書いて物語を一旦時経に返し、父を満足させた。その本が保遠の書き入れをも含めた形で書写され、今日に伝わったのであろうと思われる。保遠がこの為義との交際を通じて顕忠邸で聞いてきた歌語りを書きつけて時経に見せたことは、現実の恋愛の空しさをつくづく悟ったことを表明したことの他に、時経が『平中物語』を通じて教えようとした保身術である友人（為義）との交際重視、権門（右大臣）への接近、父（時経の注文）に対する従順、文人的関心と能力の発揮（歌への関心と気のきいた歌句の応用）という、さまざまな保身の具体相の実践をもって答えたことにもなっている。時経がいかに喜んだかはまったく想像に難くないところである。

九

保遠は、このように父時経の教育方針に十分立派に答えている。おそらく彼も父に劣らぬ真面目人間に成長したであろう。『尊卑分脈』が記すように、従五位上相模守と、受領ながらも位階では父を一段凌ぐ地位に上っていることがそれを示しているようである。

残念ながら、元服後の保遠の足跡は、この『尊卑分脈』の記事を除いてほとんど記録に現れない。わずかに、『本朝世紀』正暦五年（九九四）二月十七日の条の記事にその名が見える。やはり『増補国史大系』本によって引用すると、

十七日己亥。今日依二祈年穀一。臨時被レ立二伊勢并諸社奉幣一。（中略）広瀬散位藤原相成。龍田散位平保遠。住吉散位平維時。梅宮散位橘輔之。吉田左馬助藤原朝臣義理。広田散位平維時兼任、云々

とあり、散位ながらも竜田神社の奉幣使に選ばれている。先の年齢推定によれば、この年保遠は四十九歳である。ちょうど父時経が宇佐使に任ぜられたのとほぼ同じ年齢である。

他に保遠について確実な資料は今のところ見出せない。『西宮記』巻十三臨時一の裏書が引用する『天暦御記』逸文の応和四年（九六四）七月七日の条に、

民部卿藤原朝臣令申云。欲勘御読経日時召陰陽寮。唯□保遠一人参。先々有長其道官人二人進勘文。為之如何。云。早令保遠勘申藤原朝臣令奏日時文。（『史料大成』による）

という記事があるが、時経の子の保遠が陰陽道に長じていたというのには疑問があり、推定十九歳という年齢も不自

然である。よってこれはおそらく、あの『池亭記』を書いた慶滋保胤の兄弟である権陰陽博士慶滋保遠であろう。

また、貞元二年（九七七）八月十六日三条左大臣頼忠前栽歌合に「少納言やすとほの朝臣」なる人物が歌を一首詠出しているが、これがあるいは平保遠であるかもしれない。そうなると推定三十二歳で少納言の地位にあったことになる。しかしながら、萩谷朴氏が指摘されたように、実頼の孫で頼忠の甥にあたる藤原懐遠、後に改名して懐平が当時少納言であったことが明らかなので、これも懐遠である可能性が強い。（注17）

したがって、保遠は正暦五年（九九四）二月現在散位であり、他の奉幣使の顔ぶれから推しても、せいぜい正六位程度と、四十九歳にしてはあまりパッとしない状態であったことしかわからない。これと『尊卑分脈』の注記とを考え合わせると、保遠は家柄ゆえ昇進は遅く、散位に甘んじた時期もあったが、その間も奉幣使に任ぜられるなど行動力を発揮し、最終的には父時経と伯父兼時を上まわり、祖父貞文に匹敵する従五位上にまで昇ったということになる。時経がいつまで生きていたかはわからないが、息子が自分を越える地位にまで至ったのであるから、『平中物語』を作って保身術を教えた効果は十分あがったとすべきであろう。

ただし、保遠にも和歌の才能は父時経同様乏しかったようである。頼忠家前栽歌合に一首詠出した人物が別人であれば、保遠の詠歌は一首も残されていない。三代目ともなれば貞文の和歌的遺産で勝負することもままならなくなり、保遠は文化的にはいよいよ平凡で真面目な中流官吏として生きるほかなかったであろうと思われる。

一〇　結び

以上、『平中物語』を非権門の青年貴族に対する処世教科書と考える性格規定に基づき、その作者に平貞文の子時経を擬し、その第一享受者として時経の子保遠を想定する立場から、二人の性格や人生を追求してみた。

もちろんこれは始めにも述べた通り、今のところは大胆な仮説でしかない。しかしながら、『平中物語』という特異な歌物語の成立事情を考えるとき、『伊勢物語』のように数次にわたる増補過程も認められず、『大和物語』のように複数の作者による編集の跡も認められない。ひとりの男を主人公として、ままならぬ恋愛に幻滅をくり返すが、一

方男性社会での交際はあくまで重視する態度を描くことで首尾一貫している。このような『平中物語』の性格を考えると、その作者および執筆動機は、以上述べたように考えるのが最も合理的であろうと思う。今後さらに多方面からの考察をも進めて、平時経という人物の人間像がいっそう鮮明になり、加えて、平安朝文学史の展開における『平中物語』の位置とその存在意義が正しく規定されるべく努めたい。大方の御指導および御叱正をお願いする。

〔注〕

1. 『平中物語』の章段分けは三十八段から四十段まで諸説あるが、私は萩谷朴氏の御説とほぼ同様に、三十八段説をとる。後に巻末の顕忠母関係の説話を付載説話と呼ぶのはそのためである。
2. 目加田さくを氏『増訂平仲物語論』（武蔵野書院　昭三三）と萩谷朴氏『平中全講』（私家版　昭三四）。
3. 『平中全講』二三七頁。
4. 「平中物語の作者――貞文自作の可能性について」（『古代中世国文学』第一号　昭四九）。
5. 講談社学術文庫『平仲物語全訳注』（講談社　昭五四）。
6. 目加田氏前掲『増訂平仲物語論』第五章・阪口和子氏「平中物語の方法」（『初期物語文学の意識』所収　笠間書院　昭五四）など。
7. 稲賀敬二先生「延喜・天暦期と『源氏物語』とを結ぶもの――大斎院のもとにおける新版『住吉』の成立――」（『源氏物語その文芸的形成』所収　大学堂書店　昭五三）。
8. 日本古典全書『新訂土佐日記』（朝日新聞社　昭四四）。
9. 『平中全講』一九八頁。
10. 同右書　二四一頁。
11. 早く『河海抄』巻十にもこの記事を引用するが、それによると「故貞文字菖蒲町」とある。今、『河海抄』は『岷江入楚』所引の本文によって訂した。ただし、『史料纂集』本『李部王記』（続群書類従完成会　昭四九）には『河海抄』所引として「故貞文子菖蒲町」と記す。これと同じ形で、『平中全講』複刻版（同朋社　昭五三）には二八六頁に山口博氏示として所載。
12. 『平中全講』二三八頁以下。
13. 『平仲物語新講』（武蔵野書院　昭三三）一五八頁。
14. 『平中全講』一一一頁。
15. 「平中物語の末尾」（『国語と国文学』昭四四・八）。

16. 「平中物語末尾章段と後撰集・大和物語」（『国文学攷』四二号）。

17. 『平安朝歌合大成㈡』（私家版　昭三三）五五二頁。

〔補注〕　本文中の引用文は、整版の都合上、漢字をすべて現行の字体に改めた。

〔付記〕　本稿は昭和五五年度提出の卒業論文の一部を改稿したものである。本稿が成るまで終始懇切な御指導を賜った稲賀敬二先生に、記して厚く御礼申しあげます。

―博士課程前期在学―